

令和7年1月31日

世田谷区立千歳小学校
学校関係者評価委員各位

学校関係者評価委員会事務局

令和6年度 世田谷区立千歳小学校 自己評価報告書

「学校関係者評価アンケート・教職員自己評価 実数・回収率」

		実数	回収率
学校関係者評価	保護者	577	68.6%
	児童	756	93.4%
	地域	17	
教職員自己評価	教職員	29	

0、学校関係者評価アンケートの回収率について

昨年度の学校関係者評価アンケートの回収率向上施策を継続し、全家庭へ「学校関係者評価アンケート」のお知らせをすぐ一と紙の両方で配布するとともに、2次元コードや回答へのリンクを記載することで、その場で回答できる仕組みを引き続き活用していく。さらに、4日後、締め切り3日前、締め切り当日の3回にわたりリマインドを送信し、回答率を提示することで意識喚起を図った。

その結果、本年度も高い回収率(68.6%)を維持できた。引き続き、「学校関係者評価アンケート」が千歳小学校の教育活動にどう反映されているかを具体的に伝えることで、保護者や児童が自身の回答が学校活動に寄与していることを実感できる仕組みづくりを進めていく。

1、今年度の重点目標への取組に対する評価

1 本校の教育目標

<教育目標1>	よく考える子ども
<教育目標2>	思いやりのある子ども
<教育目標3>	体をきたえる子ども

2 千歳小ビジョン

- 子供にとって「通うことが楽しい学校」にする
- 保護者、地域の方々にとって「安心して子供たちを託せる学校」にする
- 教員にとって「教えることで教わり、子供の満足をやりがいにする学校」にする

3 令和6年度の重点目標

◎「主体と協働を併せ持ち伸びる千歳っ子」の育成

- ・自分や社会の未来の創造に向け、今できることを主体的に考え、行動に移せる児童を育成する。
- ・自分らしく生きるために現段階での課題を発見し、他者とも協働しつつ解決のための努力を続けられる児童を育成する。

数値目標に対する回答結果

- ① 「めあてや目標（ゴールイメージ）を達成するために、あきらめずに粘り強く取り組むことができる」（児童7－(1)）との感触をもつ児童の割合を80%以上にする。

1・2年 82.6% 3・4年 87% 5年 82.9% 6年 81.7%

アンケート結果から、全体目標である「80%以上」をすべての学年で達成している。

一方で高学年においては全体よりも低く、学年が上がるにつれ、学習課題の難易度が上昇することが、目標達成感や粘り強さの低下に影響している可能性が考えらる。また、学習内容が複雑になるため、課題への取り組み方や達成感を得る仕組みが重要だと考える。

改善の方向性

- ・ 達成感を得やすい指導の工夫:
中・高学年では、個別最適な学びを充実させる児童がめあての達成に対して自身にあった学習方法を選択し取り組む学習形態を取り入れていくことが有効だと考えられる。
また、振り返りの時間を設け、児童が自己の成長を実感できるようにする。

今年度行っている取り組み

「キャリア・パスポート」の活用を推進し、毎学期初めに目標を立て、学期末にそれをもとに自己の成長を振り返るようにしている。また、その振り返りに対して保護者と担任からそれぞれコメントを返すことで、成長を再確認し、めあてや目標に向かってあきらめずに粘り強く取り組めるように働きかけている。

- ② 「自分で課題を見つけて、解決していく学習が楽しい」（児童7－(2)）との感触をもつ児童の

割合を75%以上にする。

1・2年 74.5% 3・4年 79% 5年 70.7% 6年 65.9%

アンケート結果では、目標の「75%以上」を達成した学年とそうでない学年の差が明確になっている。1・2年生では74.5%と、目標にあと一步届かなかったが、自主性の芽生えを感じる結果となった。3・4年生では79%と目標を大きく上回り、中学年における学びの意欲が高いことがうかがえる。一方で、5年生は70.7%、6年生は65.9%と目標を下回り、高学年になるほど「学習の楽しさ」を感じる児童の割合が減少している傾向がある。

高学年では学習内容が増え、どうしても身に付けなければならない知識・技能が増えてしまう。そのことから、自らが課題を見付けて解決していく学習自体が十分に取れていないこと。学力差により学習自体を楽しいと感じることが難しい児童が増えてくることなどが原因と考えられる。

改善の方向性

- ・ AIドリル活用による知識・技能の確実な定着と問題解決型学習の充実

世田谷区で導入しているAIドリルを活用することで、個々に合わせた学習を進め、知識・技能の確実な定着を目指す。また、知識・技能の定着にAIドリルを活用することで、限られた時数のなかで課題解決型学習を取り入れる余裕を生み出し、課題を見付けて解決していく学習の楽しさを味わうことができるようにしていく。

今年度行っている取り組み

昨年度から引き続き、AIドリルの活用は積極的に行っており、高学年では以前は購入していた計算ドリルをAIドリルに置き換えている。また、学習内容をニュース形式にして動画制作して発表する学習を取り入れるなど、課題を見付けて解決していく学習スタイルを取り入れている。

- ③ 「学習したことから自分は何ができるかを考え、新しいことに取り組むことが好きだ」（児童7ー(3)）との感触をもつ児童の割合を70%以上にする。

1・2年 75.9% 3・4年 73% 5年 70% 6年 65%

1・2年生では75.9%、3・4年生では73%と目標を上回る結果が出ており、特に低学年や中学年での意欲が高いことが確認できる。一方、5年生はちょうど70%で目標を達成しているものの、6年生では65%と目標を下回り、高学年になるほど「新しいことに取り組むことが好きだ」と感じる割合が減少している。

高学年では、課題の難易度が上がり、学びが「挑戦」ではなく「義務」と感じられる場面が増えている可能性がある。特に、「新しいことに取り組むことが好きだ」と感じる余裕が失われている可能性がある。また、学習内容が抽象的になりがちで、それが「自分に何ができるか」を考えるきっかけを減少させている可能性がある。

改善の方向性

高学年でも学習内容を実生活や社会的な課題と関連づけることで、学んだことを自分に置き換えて考える機会を増やしていく。総合的な学習の時間を軸に、他教科とも関連付けながら探究的な学習を充実させていくことで、学習と日常生活とを結びつけやすくする。

今年度行っている取り組み

3年生では、「千歳っ子防災探検隊」として、避難所、非常食、災害について、防災グッズ、安全マップといった内容をインプット期間として各クラスで学んだあと、より深めたい内容を児童が選び、クラスを解体して5グループに分かれ活動を行なった。今日の学習内容を児童が教師に聞くのではなく、自分たちで計画をし、教師が伴走をするという立場になれるよう心がけた。また、お弁当期間に非常食を教員が紹介するなど授業時間以外にも関心を高められるようにした。

- ④「自分らしさを大切にし、他の友達の良さも大事にしている」(児童7-(4))との感触をもつ児童の割合を90%以上にする。

1・2年 92.2% 3・4年 92% 5年 95.7% 6年 95%

アンケート結果では、すべての学年で目標である「90%以上」を大きく上回る結果が得られている。1・2年生は92.2%、3・4年生は92%と、低学年から中学年にかけて高い割合を維持している。5年生では95.7%、6年生では95%と、特に高学年での意識が非常に高いことが確認できる。

この結果から、千歳小学校の教育が児童一人ひとりの「自分らしさ」を尊重すると同時に、友達の良さを認め合う環境をしっかりと育んでいることが分かる。学年が上がるにつれてさらに高い割合が示されていることは、学校全体の取り組みが児童に良い影響を与えていることを示している。

今後の方向性

引き続き「自分らしさ」と「他者の尊重」を大切にする教育を推進していく。特に、協働学習を通じて、これらの価値観をさらに深めることが求められる。高学年の結果が非常に高いことを踏まえ、この傾向を活かして高学年を中心としたたてわり活動やクラブ活動といった特別活動に力を入れていく。特別活動を通じて、全体をまとめる力を養うことで、高学年も下級生も共に成長していくことが期待される。

今年度行っている取り組み

今年度より、運営委員と各委員会の委員長副委員長で構成する代表委員会を設置し、児童会活動を充実させている。また、協働的な学びについては、校内研究のテーマを「なかまなび」とし、多様な協働的な学びについて研究を深めている。

重点目標を達成するための基本方針

キャリア教育 ー各教科と関連付けた、意図的計画的な取り組みの充実ー

「キャリア・パスポート」をもとに、児童が自分らしく生きるためにありのままの自己を受け入れ、なりたい自分の目標を掲げ、他者からの評価を自信に変えて次に進めるような取組の場を学習や生活の場面に計画的に設定する。

児童

自分の生き方や将来のことについて、考える授業がある。4-(1)	78.8%(+5.2)
目標をもち、その実現に向けて努力している。4-(2)	81.5%(+2.4)
区立中学校に関する情報が提供されている。4-(3)	46.9%(-2.5)
私は、めあてや目標を達成するために、あきらめずに取り組むことができる。7-(1)	80.4%(+1.2)
私は、自分らしさを大切にし、他の友達の良さも大事にしている。7-(4)	92.1%(+5.0)

保護者

本校の教員は、子どもに目標をもたせ、その実現のために支援している。4-(1)	62.9%(+1.2)
本校は、子どもの生き方や将来のことについて考える授業をしている。4-(2)	54.3%(+1.6)
本校の児童は、自分の目標に向かって、あきらめずに粘り強く取り組むことができている。12-(1)	65.5%(-1.0)
本校の児童は、自分らしさを大切にし、他の友達の良さも大事にしている。12-(4)	73.2%(-2.2)

児童のアンケートでは、「自分の生き方や将来のことについて考える授業がある」について肯定的な回答は 78.8% (+5.2) であり、前年度より向上した。これは、キャリア教育の意図的な取組が一定の成果を上げていることを示している。また、「目標をもち、その実現に向けて努力している」児童の割合は 81.5% (+2.4)、「めあてや目標を達成するためにあきらめずに取り組むことができる」との回答は 80.4% (+1.2) となり、「キャリア・パスポート」の活用により、目標を意識し、その実現に向けて努力する児童が増えていることが確認できる。「自分らしさを大切にし、他の友達の良さも大事にしている」との回答は 92.1% (+5.0) と高く、自己肯定感や他者理解の促進が成果を上げていることがわかる。

今年度はキャリア・パスポートのさらなる活用を目指し、学校全体で様式を統一した。そして、各学期末に全児童が振り返りを行い、それに対して、担任と保護者それぞれがコメントを書き加えることで、児童が目標を掲げ、他者からの評価を自信に変えて次に進めるようにしていった。

保護者のアンケートでも、「教員が子どもに目標をもたせ、その実現のために支援している」との回答は 62.9% (+1.2)、「学校が子どもの生き方や将来のことについて考える授業をしている」との回答は 54.3% (+1.6) と、前年度より向上している。しかし、児童の回答とは大きな差があり、キャリア・パスポートとその活用について、まだ十分な認識が得られていないことが課題である。

また、児童のアンケートでは、「区立中学校に関する情報が提供されている」との回答は 46.9% (-2.5) であり、保護者のアンケートでも、「『学び舎』の区立中学校について情報が提供されている。」との回答は 38.0% (-0.7) と低いため、区立中学校に関する情報提供の充実が課題であると考えられる。これに関しては、今年度学び舎の区立中学校に 6 年生が実際に行き中学校の授業を体験するという取り組みを行っ

た。引き続き、学び舎で連携し、中学校との関わりを増やしていきたい。

「本校の児童は、自分の目標に向かって、あきらめずに粘り強く取り組むことができている。」との回答は 65.5% (-1.0)、「本校の児童は、自分らしさを大切にし、他の友達の良さも大事にしている。」との回答は、73.2% (-2.2) と前年度と比べて低下している。「キャリア・パスポート」の活用を通じて、努力の過程を記録し振り返る機会を増やすことで、児童が自分の成長を実感すると共に、保護者ともその成長を共有できるようにしていく。

「せたがや探究的な学び」の推進に向けた取組の充実

児童一人一人が課題を見付け、仲間と協働しながら自分の考えを深め、表現していく問題解決的な学習活動を各教科等で繰り返し行う。各教科の特質に応じた見方や考え方を明確にして授業を計画し、児童に必要な資質・能力を育成する。

児童

先生は、課題（めあて）について、自分で考えたり、友達と考えたりする時間を授業の中で取っている。1-(2)	93.5%(-2.2)
私は、自分で課題を見付けて、解決していく学習が楽しい。7-(2)	72.1%(-0.7)
私は、学習したことから自分は何ができるかを考え、新しいことに取り組むことが好きだ。7-(3)	70.6%(+1.1)

保護者

本校は、子どもが考えることや、課題を解決することを大切にした授業を行っている。1-(1)	79.2%(+0.2)
本校の児童は、自ら課題を見付け解決していく探究的な学習を楽しんでいる。12-(2)	60.6%(-1.1)

児童のアンケートでは、「先生は、課題（めあて）について、自分で考えたり、友達と考えたりする時間を授業の中で取っている」との回答は 93.5% (-2.2) であり、高い水準を維持しているものの、前年度よりやや低下している。このことから、課題に対する児童の主体的な関わり方や、友達との協働学習の在り方について、さらなる工夫が求められる。

また、「私は、自分で課題を見付けて、解決していく学習が楽しい」との回答は 72.1% (-0.7) であり、「私は、学習したことから自分は何ができるかを考え、新しいことに取り組むことが好きだ」との回答は 70.6% (+1.1) となっている。後者の回答がやや向上していることから、学習を通じて児童が新たな挑戦を楽しむ姿勢が少しずつ育っていることがうかがえる。しかし、前者の「課題の発見と解決の楽しさ」の項目がわずかに低下していることから、児童が自ら課題を見付け、それを解決する過程により魅力を感じられるような学習活動の工夫が必要である。

今年度の校内研究では、昨年度の探究的な学びをベースに協働的な学びについて研究を深めてきた。授業研究では、多様な教科で問題解決的な学習活動を行い、児童が自分の考えを深め、表現する機会を増やした。特に、各教科の特質に応じた見方・考え方を明確にした授業設計を行い、児童が「なぜこの学習をするのか」を理解しやすいように工夫した。また、学習の振り返りを重視し、児童が自らの成長を実感できるような活動を意識的に取り入れた。

保護者のアンケートでは、「本校は、子どもが考えることや、課題を解決することを大切にした授業を行っている」との回答が 79.2% (+0.2) であり、前年より微増している。しかし、「本校の児童は、自ら課題を見付け解決していく探究的な学習を楽しんでいる」との回答は 60.6% (-1.1) と低下しており、保護者の視点からは、児童が主体的に学びを楽しんでいるかどうかに懸念があることがわかる。この点については、児童が日々の学びの中でどのように課題を見付け、解決しているのかを家庭とも共有し、探究的な学びの意義を保護者にも理解してもらうことが重要である。

今後は、「せたがや探究的な学び」をより充実させるために、各教科の学びを相互に関連付け、児童がより深い学びを体験できるような工夫を進めていく。また、学びのプロセスを可視化し、児童が自らの成長を実感できるような振り返りの機会を増やしていくことで、学習の楽しさをさらに高める取組を継続していく。加えて、保護者との連携を強化し、家庭でも探究的な学びの価値を共有できるような情報提供を進める。

教育 DX の推進 — 1 人 1 台端末を文房具のように活用した学習活動の充実—

児童が見付けた課題の解決のために ICT 機器及び学習支援アプリを駆使し、仲間との共有や統合を通じて知識や理解を深化させる。DX の長所である「いつでも、どこでも、だれとでも」を生かして学校での学習や家庭での学習の充実を図る。

児童

先生は、映像やタブレットを工夫し、分かりやすい授業をしている。1-(5)	87.7%(-2.9)
私は、家庭で宿題や e-ラーニングでの学習をしている。6-(3)	70.4%(-0.2)
私は、学習用タブレットを上手に使い学習を進めることができる。7-(6)	88.0%(+2.9) ※質問文に一部変更あり

保護者

本校は、映像やタブレットを工夫し、分かりやすい授業をしている。1-(4)	71.4%(-2.3)
本校の児童は、学習用タブレットを効果的に活用し、学習を進めている。12-(6)	65.7%(-8.3)

児童のアンケートでは、「先生は、映像やタブレットを工夫し、分かりやすい授業をしている」との回答が 87.7% (-2.9) であり、依然として高い評価を得ているものの、前年度より低下している。これは、ICT を活用した授業が一定の効果を上げている一方で、児童の受け止め方や授業デザインにさらなる工夫が必要であることを示唆している。

また、「私は、家庭で宿題や e-ラーニングでの学習をしている」との回答は 70.4% (-0.2) であり、大きな変化は見られなかった。これは、家庭学習における ICT の活用が一定の定着を見せていることを示しているが、児童が主体的に活用できる環境づくりが引き続き求められる。

一方、「私は、学習用タブレットを上手に使い学習を進めることができる」との回答は 88.0% (+2.9) であり、前年より向上している。これは、タブレット端末の活用に関する指導が浸透し、児童がスムーズに学習を進めるスキルを身に付けつつあることを示している。今年度は、タブレット端末を活用した課題解決型学習の機会を増やし、児童が「いつでも、どこでも、だれとでも」学べる環境の充実を図った。

保護者のアンケートでは、「本校は、映像やタブレットを工夫し、分かりやすい授業をしている」との回答が 71.4% (-2.3) であり、児童の評価と比較するとやや低い傾向にある。また、「本校の児童は、学習用タブレットを効果的に活用し、学習を進めている」との回答は 65.7% (-8.3) となり、大きく低下している。この結果から、保護者は ICT の活用による学習効果を十分に実感できていない可能性がある。家庭での学習支援アプリの活用状況や、児童がどのようにタブレットを使って学習を進めているかについての情報発信を強化することが求められる。

今後は、ICT 機器を単なる学習ツールとしてではなく、課題解決のための手段としてより有効に活用できるよう、授業設計のさらなる工夫を行う。また、家庭での活用促進のため、タブレットや学習支援アプリの使い方に関する情報を保護者へ発信し、学校と家庭が連携して児童の学びを支援する体制を整えていく。

2、学校関係者評価より見えた本校の課題と改善策

課題：保護者・地域と児童の意識の乖離

学校評価アンケートの結果から、児童の学校に対する意識が大きく向上していることがわかった。「学校生活は楽しい」との回答は 85.9%→90.8%、「学校が好き」は 74.5%→84.2%、「先生たちに相談できる」は 72.2%→83.1% と、それぞれ前年度より大きく増加し、児童が学校や先生に対してポジティブなイメージを抱くようになっていくことが確認された。このことから、学校の教育活動や児童との関わり方の工夫が成果を上げていることがうかがえる。

一方で、保護者や地域の意識は低下傾向にある。「学校生活は楽しい」との回答は 87.8%→85.8%、「子供のことを相談しやすい」は 77.9%→77.1% と若干の低下が見られる。さらに、「地域の中の学校ということ大切にしている」との回答は 86.4%→70.6% と大幅に減少しており、地域の学校に対する関与や認識が弱まっている可能性がある。保護者の学校に対する肯定的な回答も全体的に低下しており、児童と保護者・地域との意識の乖離が課題として浮かび上がっている。

この結果から、児童の学校生活に対する肯定的な意識を保護者と共有する機会を増やすことが大切であると考えられる。具体的には、学校の取り組みや児童の成長の様子を伝える学校だよりや学級通信の充実、保護者向けの学校説明会や保護者会の内容を充実させ、学校の現状や方針を直接伝える機会を大切にしていく。また、学校運営委員会など保護者や地域からの意見を積極的に取り入れる場を設け、学校運営への参画を促進する。加えて、学校の魅力を発信する広報活動を強化することが必要だと考える。学校での取組や児童の学びの成果を発信することで、保護者や地域の理解を深めることができる。学校のホームページを活用し、児童が楽しみながら学んでいる姿を発信することで、学校の魅力をより多くの人に伝えることができると考える。また、学校便りを充実させ、学校の活動や成果を積極的に伝えることも有効であると考えられる。

また、「地域の中の学校としての意識」が大幅に低下していることから、地域と学校の結びつきを強化する取組が必要である。地域の方々が学校教育に関わる機会を増やし、交流を促進することで、学校が地域と共に歩む姿勢を示すことが重要となる。例えば、6年生のリアル職業調べをはじめとした地域の方々をゲストティーチャーとして招いた授業を推進し、双方向の関係づくりを強化する。保護者ボランティアの活用や、地域の人々をゲストティーチャーとして招くなど、学校運営に協力してもらうことで、学校

に対する関心を高めてもらう。また、保護者と教員が対話できる機会を増やし、学校の教育方針や課題について共有することで、信頼関係を深めることができる。

今後は、児童の学校に対する肯定的な意識をさらに伸ばしつつ、保護者や地域と学校とのつながりを強化し、学校全体としての一体感を醸成していくことが求められる。学校・保護者・地域が一緒になって教育活動を支え合う環境づくりを進め、誰もが関わりやすい学校を目指していく。